

# 短歌にみる幼児



窪田章一郎

(一)

子どもは何人あってもいい、もっと欲しいという友人の言葉を聞いたとき、これが人間本来の健康な心だと思ひ、その明るい声の響きに、あらためて敬意を覚えたことがある。子宝という昔からの言葉があるが、ある年齢になって、その意味がよくわかる氣のしたことがある。

また、子どもはさずかりものだという古い言葉もある。世の中を見渡すと、このことも真理だと思ふ。子どものない人はどんなにかさびしいことであろう。つきつめていくと、親と子との關係が人生においてもっとも深い無条件の愛の対象である。この愛があつて人類は存在したのであり、やがて子どもは成長して親となり、おなじ体験を重ねていくはずである。

大学を卒業して、そろそろ婚期にはいつている女子学生がある日、「おまえたがいがいなかったら、お父さんはこんなに働かなかつた」と父親に言われたと、研究室での雑談で洩らしたことがあつた。父親である人は立派な実業家であるが、娘たちに財産を残そうというのではなく、もし子どもというものがなかつたら働き甲斐がなかつたらうという氣持をこめての言葉であつたらうと私は聞いた。つきつめていくと人々はみな單純であるが、もっとも深い愛情を秘めて生活しているのが思われる。

このような人間共通の感情が、短歌にどのように詠まれているか、とくに幼児を対象としたものはどうであろうか、という編集部から与えられた題目にしたがつて、私は記憶をたどりながら、胸に浮かんでくる短歌を紹介し、味わつていこうと思ふ。この種類の作品はどんなにか多いことであろう。しかし今は十分な余裕

がないので、思いつくままにペンをはしらせることとした。

(二)

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも  
しろがねくがね

万葉集中では、子どもを詠んだ歌はこれがかもつとも有名である。銀も金も珠玉も、何で、すぐれた宝である子に及ぼうか。宝の代表とされている物に比較して、子どもが何よりも勝っているという歌意である。作者は山上憶良、このとき七十歳を越えていた。このころ奈良の大仏が造営されたが、途中で金が不足したとき、偶然にも宮城県から金が差し出され、聖武天皇はよろこんで天平勝宝という年号に改められたことがあった。この勝宝は「まされる宝」という意で、金であった。憶良はそれよりも子どものほうが遙かにすばらしいというのである。

この歌の心は健康で明るい。考えてみればだれしもが同感する当り前の心であるが、それを力強くはつきりと歌っているところに魅力がある。また、このように詠むことのできた憶良はしあわせであったと思う。

話題は少し転じて現代のことになるが、過日テレビで太田薫さんが対談しておられたのが思い起こされる。戦後の日本がめざましい復興をしたのは、優秀な日本人の労働力のたまものだった。

日本は石油・材木・鉄・石炭など重要資源に乏しいので、外国から輸入し、優秀な素質をもつわれわれの労働によって製品とし、輸出して立っていくよりほかに途のない国である。ところが近年、人口は減少の傾向をとり、夫婦は平均二人の子どもを育てるのが限界になっている。これでは十年、二十年後になると現在でも不足がちな労働力はどうなるのだろうか、という主旨であった。子どもを三人、四人と育てられるだけの住居や、それを可能にする経済力が、まず前提とやらなくてはならない。この点をまず何よりも解決していかないと亡国ということにもなりかねないという結論であった。

憶良が「勝れる宝」と千年以前に歌ったのは、親としての愛情からであった。それは現在も変化しているはずはないが、さらにその上に立った一国の存亡ということも巨視的に考える必要があるとすると、「勝れる宝」にまた新しい意味をもって味わわれるようになる。

(三)

万葉集はゆたかに人間の心を表現したが、幼児を詠んだ短歌はほとんどない。それ以後の短歌も次第に表現内容をひろくしているが、幼児そのものを対象としたものは少なかった。

このような歴史のなかで、江戸末期の歌人良寛と橘曙覧とが、

現われてあたたかい心をもって幼児の歌を詠むようになった。子どもを可愛いく思う心は歴史とともにあったが、短歌に現われてくるのは新しいことで、これらの歌人の後、明治時代にはいつてから、はじめて盛んになった。そして今日は、歴史的にみてもっとも多いといえよう。

時代の推移、生活の変化によることである。

この宮の森の木下に子どもらとあそぶ春日に

なりにけらしも

この里に手まりつきつつ子どもらとあそぶ春日は

暮れずともよし

霞立つながき春日に子どもらと手毬つきつつ

この日暮らしつ

これは良寛の歌。一八三一年、七十四歳で越後の国出雲崎で亡くなった禅僧で、春になると山寺から里人托鉢に出て、子どもらと遊ぶのを楽しみの一つにしていたのが、これらの短歌でわかる。良寛というと、すぐ想起されるほど親しまれている作品である。当時の毬は綿や布をまるめて、いろいろの糸でかがって美しく作ったものであった。やや大形の毬で、今も良寛遺愛品として残されている。食物をもらうための托鉢に赴くとき、すみれやた

んぼの花などを摘んで鉢の子をいっぱいにし、しかもそれを置き忘れて帰って来てしまったと詠んでいるような天真爛漫な短歌もある。花を摘むのも子どもらといっしょだったろう。

良寛は生涯母を恋慕っていた。結婚をせず自分の子はなかったが、親を慕うあたたかい愛情は、形をかえて差別なくどの子にも注がれていたようである。良寛が子として親から愛された感謝の気持は、年齢をかさねるとともに深まっていた。良寛の純真な、あたたかい、大らかな気持は、そのもとづくところを思うと、親の愛がいかに大きな価値をもつものであるかが知られる。

おそらく良寛の母もその親たちに愛されたであろう。その心が受け継がれて良寛の短歌の中に詠み生かされ、さらに後の世にもはたらきかけているのを思うと、人間の歴史というものが考えられてくる。

たらちねの母がかたみと朝夕に佐渡の島べを

うち見つるかも

これは幼児の歌ではないが、良寛が母を詠んだ代表作として挙げておきたい。母の生地が佐渡相川であったので、亡き母を見る思いがして「かたみ」と詠んでいる。心のこもった歌で、出雲崎から海上に遙か横たわる島を目に浮かべることができる。